

母子相互作用の臨床的・実験的研究

二 木 武（東京都立母子保健院）

1) 母子相互作用の実験的研究

母親あるいは保育者と乳児の間の母子関係成立過程を種々の実験場面を設定して検討した。指標としては心拍・呼吸などの生理的反応も用いたが、とくに心拍数の変動は外見からは十分に把握することが困難な乳児の心的な反応を知る上で有意義で鋭敏な指標とすると考えられ、次の結果を得た。

① 乳児は出生直後の新生児期より人に注意を向け、人の声や顔に対して敏感に反応し、人との相互交渉に積極的に参加していることが生理的指標からも立証された。

② 乳児は人に注意を向け、人との相互交渉を持続させるために、自己の内的興奮をコントロールするシステムとして「目そらし」行動を行っていることがわかった。

③ 人との相互交渉をくりかえすことにより、乳児は特定の人に対し後追的な追視が生ずるようになり、アタッチメントの萌芽が生後20週ぐらいから現われることが生理的指標からも認められた。

更に今後、次のような方向で研究をすすめたい。

① 母親は乳児を覚醒水準のよい状態に保ち外界との交渉が持続できるように、また児がすみやかに眠りに入りやすいようにと適切な「なだめ」の行動をとることが多いが、この行動の適切さと、母親経験、性格、乳児の気質などの特徴との関係を検討する。

② 新生児が人や母親の声に注意を向け、記憶し、母親の声を特別ななじみのある声として組み入れていく過程をさらに検討する。

③ 乳児の注意のサイクルと内的興奮状態のサイクルの発達、また「目そらし」行動のほかに覚醒水準を調節する行動と考えられる乳児の「もじもじ」行動、「微笑」の発達を検討する。

2) 妊娠期の母子関係

母子相互作用やアタッチメントの形成は、出生後より、さらに妊娠期から研究する必要がある。そこでこの目的のための第一歩として、妊娠期の

母子関係、すなわち妊婦と胎児との関係を中心に、その心理的な様相を明らかにするために妊婦用文章完成法検査(SCT-PKS)を作成し、これを実際に使用した結果は次のごとくであった。

① SCT-PKSにおける妊婦の反応をカテゴリ化し、その頻度を調べたが、その結果から妊婦が胎児や出生後の子どもに対してどのような心理状態にあるかの一般的傾向が示された。妊娠については、喜びの情緒とともに受容する人が多い一方、とまどい、ショック、不安をもつ人もかなりおり、また少数ではあるが「暗たんたる気持」などネガティブな反応を示す例もみられた。

② 反応の一般的な傾向をさらに明確にするために、得られたデータを数量化第Ⅲ類を適用して分析した。

③ 上記の検討を経て、妊婦用SCT-PKSの改訂版、および妊婦の夫が記入する男性用SCT-PKSを新たに作成した。現在、これらのデータについても統計的処理をすすめてつある。

更に今後、次のような方向で研究をすすめていきたい。

① SCT-PKSをさらに検討し、標準化して実際の臨床に使用し、妊婦の精神衛生上の援助の手がかりとしたい。

② 本法を活用して、妊娠期の母子関係と乳児期の母子関係との相関について、継断的に検討する。

3) 乳児院退院児の家庭への適応

母子が比較的長時間分離した場合の母子関係に及ぼす影響を臨床的に検討するために、乳児院に入院した児の退院後の家庭への適応について検討し、次の結果を得た。

① 退院後家庭に適応できるまでの期間は、退院当日から何の問題も示さなかった児から、適応までに2~3ヶ月以上を要する児もあった。

② 適応するまでの期間には、退院時の年齢、在院期間、面会の頻度が関係があり、退院時の年齢が低く、在院期間が短かく、面会の頻度が高い

ほど、はやく適応する傾向がめられた。性別や入院時の年齢との間の関連は認められなかった。

③ 退院直後にはさまざまな反応が認められたが、それらは基本的には、家庭という、児にとってはなじみのない環境に対する不安、あるいはその不安を解消しようとするアタッチメント行動と解された。

④ 退院後の家庭適応状況は、ある程度の期間を要するものの、大体良好なものが多かった。しかし、退院後殺害や虐待を受けた児があったことが注目され、しかもこれらの児と比較的共通して

いる状況があり、今後の指針となった。

さらに今後、次のような諸点について検討を重ねる予定である。

① 今回の研究は短期予後に関するものであったが、継続的に follow することにより長期的な影響を検討する。

② 退院後の適応に関連する要因として、家庭での取り扱い、児の気質の特徴などを検討する。

③ 小児科病棟へ比較的短期間入院した児について、同様の検討を行う。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1) 母子相互作用の実験的研究

母親あるいは保育者と乳児の間の母子関係成立過程を種々の実験場面を設定して検討した。指標としては心拍・呼吸などの生理的反応も用いたが、とくに心拍数の変動は外見からは十分に把握することが困難な乳児の心的な反応を知る上で有意義で鋭敏な指標とすると考えられ、次の結果を得た。

乳児は出生直後の新生児期より人に注意を向け、人の声や顔に対して敏感に反応し、人との相互交渉に積極的に参加していることが生理的指標からも立証された。

乳児は人に注意を向け、人との相互交渉を持続させるために、自己の内的興奮をコントロールするシステムとして「目そらし」行動を行っていることがわかった。

人との相互交渉をくりかえすことにより、乳児は特定の人に対し後追的な追視が生ずるようになり、アタッチメントの萌芽が生後 20 週ぐらいから現われることが生理的指標からも認められた。